

禅

31号(通卷211号)



富士を望む(立田英山写真集『我ここに今かく在りぬ』より)

世界楽土の建設を 目標とする

廣内 常明

人間禅教団（以下「人間禅」という。注1）の創設者である耕雲庵立田英山老師は、禅界に1700則あるといわれている公案（注2）の中から200則を慎重に選び、悟境の深浅に従って体系的に整備し、順序立て、『^{がせんしゅう}瓦筌集』の題名で公開されました。これは、それまでの禅界の歴史には見られなかった、画期的な公案集であります。

この『瓦筌集』は、禅の修行による着実な人間形成を促がす教育課程であります。学人は、これらの公案を真剣に工夫し、その中に込められた祖師達の悟境を明らめ、初め見性入理から、悟後の修行によってその境涯を高め、さらに仏祖嫡伝の法を証得（注3）するまで、向上を目指していくのであります。

人間禅は、従来の伝統を破って、道を求める人たちに参学することができる禅の道を開いたのであります。真実の自己に目覚め大安心を得させ、正しく・楽しく・仲のよい人類の行方を指し示す灯火を掲げているのであります。

平成18年に人間禅から出版された『Gasenshu』は、その英訳版であり、「世界楽土の建設を目標とする」人間禅の重要な布石であり、本年2月にご逝去された第三世総裁磨輒庵^{まぜんあん}白田^{ごっせき}劫石老師の、熱い思いの結晶であります。

日本内・外のあらゆるご縁のある方々に親しくご覧いただき、参じていただきたい人類が誇る精神的な宝であります。

史書をひもときますと、1893年にシカゴで開催された第一回世界宗教者会議に参加された、当時円覚寺の管長であった釈宗演老師は、耕雲庵老師の法上の祖父であります。宗演老師の法をつ嗣いだ釈宗活老師のはっす法嗣である曹溪庵そうけいあん佐々木指月老師（1882-1945）は、1906年渡米以来亡くなられるまで、太平洋戦争の大変困難な晩年を含んで、禅の布教ささに一生を捧げられました。

一方、同じく釈宗活老師の法嗣である耕雲庵老師（1893-1979）は、日本の戦後の混乱期をふしやくしんみょうざい不惜身命財（注4）で法を護持され、世界楽土の建設を目標とする現代にふさわしい祖師禅（注5）としての居士禅者の修行団体・人間禅を設立されたのであります。

以来六十有余年、現在16の支部、五つの禅会ならびに14の禅道場を有し、第五世総裁葆光庵丸川春ほうこうあん しゆんたん潭老師を中心に、布教・伝法活動が活発に展開され、さらに飛躍的な発展を期しているところであります。

先日、短期間ですがタイを訪れました。貧富の差が大きな中で、国全体に見られる僧を大事にする光景は、経済大国といわれる日本では失われて久しいものであります。上座仏教（小乗仏教）が主流ということですが、いくつかの寺院で目にした高僧のわット蠟像ろうぞうの眼に、国民の幸せ向上への切なる願いを感じたものであります。

タイ訪問に先立って、ヨーロッパにおける曹洞禅そうどうの実際にも少し触れることができました。関心の的は、「修行者たちに、いかに臨済禅の眼目である『見性』、真実の自己を徹見させ、またそれをいかに鍛え育て上げていくのか。」でありました。

ちなみに、道元禅師のお言葉に、【自己をはこびて、万法（注6）を修証（注7）するを迷いとす。万法すすみて自己を修証するは悟りなり。】とあります。

これを私なりに、万法の何たるかに触れる見性入理を基盤にして、万法を身に馴染ませようと必死に努めている見性悟道、万法が身に馴染んだ見性了々底と見ておりますが、いかがでしょうか。

禅師はまた【道(注8)本円通(注9)争でか修証を仮らん。(注10)】と示されています。従って【仏法には修証これ一等(注11)なり。】で示される禅師の「修証一如」(注12)の境地というものは、「通身是れ道」の見性了々底の境地であると思うのであります。

煩悩・妄想の雑草を払いのけて唯我独尊たる主人公(注13)をしっかりと発見し、さらに長い年月をかけて育て上げていく。そしてついには、万法と自己とが一体となり、本来の姿が顕れる「修証一如」の境地に達すると思うのであります。ここは、私たちが修行の目標としている境地であります。

【この法は、人人の分上に豊かにそなわれりといえども、未だ修せざるには現れず、証せざるには得ることもなし。】とも仰っているように、この境地たるや、文字通りの只管打坐(注14)を、どんなにまじめに何年続けようとも、到達できるものではないと思います。

落ち込もうとする、チーンと取り澄ました「死に人坐禅」のど真ん中に、大疑団をぶち込んで、全身火の玉にさせて、小さな我根を突き破っていく、そういう仕掛けが不可欠だと思うのであります。

今や、インターネットで調べますと、世界中のどこでも禅会が開かれており、禅的土壌の拡大という意味では喜ばしいことですが、道元禅師が納得される禅会が増えてほしいものであります。

私たち人間禅が有する祖師禅としての教育システムのありがたさに、その思いを強くするのであります。

編集部注

(注1)人間禅：人間形成のための禅の意。

- (注2) 公案：公文書の意であるが、禅宗で、修行者が悟りを開くために与えられる課題。人間として共通の人生の根本問題。
- (注3) 証得：得ること。完成すること。悟ること。
- (注4) 不惜身命財：仏法を得るために、身命財をささげて惜しまないこと。
- (注5) 祖師禅：祖師である達磨だるまが正伝した禅。
- (注6) 万法：あらゆる事物。現象となって現れた真理。
- (注7) 修証：修行し悟ること。
- (注8) 道：大道。大自然の生命。
- (注9) 円通：(絶対の真理は) 全てのものにあまねくゆきわたっているの意。
- (注10) 仮る：「借る」に同じ。他の助力、協力を受ける。
- (注11) 修証一等：正しい坐禅とその行持(修行を常に止めないこと。)そのものが悟りであるとの意。
- (注12) 修証一如：「修証一等」に同じ。
- (注13) 唯我独尊たる主人公：「天地と我と同根、万物と我と一体」なる我。真実の自己。
- (注14) 只管打坐：ひたすら坐禅すること。

著者プロフィール



ひろうち

廣内常明(本名/誓文)

昭和18年生まれ。神戸大学大学院理学研究科修士課程修了。元公立高校校長(兵庫県)。昭和39年、人間禅白田劫石老師に入門。現在、人間禅師家。庵号/藏ぞうろく六庵。